

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

僕は、誰なんですか？

小六・室賀 礼衣

海辺の浜に、一匹の蟹が居た。

夜空の星屑が水面に煌めいている。風情を眺め、蟹は考え込んでいた。

自分は何をしていたのだろう、と。

殻は割れ、中からは肉が見えている。塩を含んだ風に吹かれては、身を潜めるように隠れた。

砂に埋もれながら、虚ろな意識で考える。

そういえば……。

蟹は生まれた時、その一瞬から孤独だった。

周りには誰も居らず、ただ海を漂う和布と珊瑚に囲まれていただけの毎日。蟹はただ月日を重ね、ある日。見飽きた岩場の影から、一匹の鯨が姿を現した。鯨は誰でも分かる。いわば、常識の範囲内に属する魚である。けれど、自分以外の生き物を見たこともない蟹にとって、

初めての出会いだった。

自分以外の生き物。その存在が強く心に根を張ったからか、蟹は自分について興味を持つようになる。自分とは何なのか、自分は何処の誰なのか。そんなことを意識し始めた蟹は、自分探しの旅に出る事にした。

八本の足と、二本のハサミを携えて。

旅と言っても、ただ海を漂うだけである。蟹は、海の中でも物知りと称されるシヤコガイに、己は何なのかを聞いてみた。

「先生。僕は何処で生まれて、僕はどのような者なのですか？」

けれど、シヤコガイは黙り込むばかりで、何も答えてはくれなかった。不思議に思いつつも、次は通り過ぎた魚に聞いてみた。

「僕は何処で生まれて、僕は誰なんですか」

魚は何かを受けたように顔を歪ませて、そのまま通り過ぎてしまった。

誰に聞いても、誰に問おうとも、答えてはくれない。魚達は、初対面の上に自分を何処の誰かなんて聞く蟹を、馬鹿の類だと思っているのだ。気づいていない蟹は、哀れにも己の正体を聞き回っていた。けれど、幾ら聞こうが問おうが、誰も見下したような視線で蟹を見、応えはしない。

気づいた時には、もう遅かった。

辺りの魚に聞き回った果て、蟹は途轍もない孤独感と劣等感に苛まれた。

旅に出るまでは感じなかった、孤独。自分には無いものを知ってしまったから、自分以外の存在を知ってしまったから。あるいは、そのどちらでは無く、他の理由が有るのかも知れない。

蟹は泣き疲れて、岩場の影で眠りについた。

蟹が目を覚ますと、海はもぬけの殻だった。

燦然とした海中でただ和布や珊瑚たちが揺れ動き、微かに砂埃が立っている。

どうしたのかと思考を巡らせてから、瞬時に分かった。

衝撃波が蟹を襲い、円を描きながら蟹は吹き飛ばされた。津波で

ある。

海の産物達は、津波を恐れて、何処か遠くの海に拠点を移したのだ。

勿論、蟹が寝ている間に。

蟹は絶望した。自分は見捨てるような存在であったのか、自分をただ知りたくて声をかけた事が、それほど迄に愚かだったのか、と。体を岩場にぶつけ、殻にヒビが入る。その度に激痛が疾走った。

そして、今に至る。

蟹は、死を確信した。致命傷である。海に入れたとしても、海水が沁みて苦痛に藻掻くだけ。

意識が保てるのも、あと数分程度。

ふと前を向くと、蛍火のように微かな淡い光が、目の前に現れた。声をする。

「まだ、生きておりますか？」

温和で、暖かな声である。蟹は頷いた。

「貴方はもうじき、この世ではない別の世界へと昇天します。其の前に、何か言い遺す事はありますか？」

蟹が、ふりしぼって声を上げた。

「神様。一つ聞いても？」

「ええ、良いですよ」

「僕は何処の誰なんですか？」

神様は目を丸くして、本当にそれでよいのですか？と落ち着いた口調で訊く。

「それが知りたくて、遙々遠くの海から、物知りと称されるシャコガイの先生の元へ訪ねました」

---

——僕は何処で生まれて、僕はどういう者なのですか？

「誰も答えてはくれなかった。そんな事も分からないのか？なんてバカにしたような目を向けられて。でも、神様なら、答えてくれるんじゃないかなって」

神様は言った。

「貴方は蟹と呼ばれる種族に生まれました。両親は貴方を産んで、その後何者かに捕食されたようですね。一匹両親に守られて産まれたのが、貴方です」

蟹の心は、暖かさで満たされた。

あの孤独感を。埋めるかのように。

「本当に、これで良かったのですか？」

蟹の笑みは満ちていた。

「ええ。ありがとうございます：」

神様が上を見上げると、星が輝いていた。

今宵は新月。今夜は、満月に隠れていた星々が、著しく輝く一時間なのだ。

——蟹は静かに目を閉じて、

そのまま息を引き取った。

其れを神様は空へ昇げて、蟹はもう孤独では無くなった。

今では様々な人々に、星を繋げて、

見守られて居るからだ。

『蟹座』

これが、蟹の正体である。

---